＜沖縄レポート～生協労連・沖縄戦跡めぐり・基地調査に参加して＞

井原分会・藤島

はじめに

去る 6 月 18 日から 3 日間、労連主催の沖縄戦跡めぐりと米軍基地調査に参加してきました。生協労組おかやまからは私・藤島と副委員長の水田さんの２人で行ってきました。単組は、北はみやぎから南は九州の生協中心に 18 の生協、合計 50 名の参加で、3 日間のフィールドワークをこなすという密度の濃い内容でした（ほとんど観光はありません）。その中で印象に残ったことを 4 点報告したいと思います。

１戦跡めぐりからみた沖縄戦の悲惨さ・不条理

初日は、沖縄戦で激戦が繰り広げられた南部を回りました。まぶにの丘、平和の礎、平和祈念資料館、糸数濠（アブチラガマ）等を訪れました。沖縄平和ネットワークのガイドさんが、沖縄戦の悲惨さを教えてくれながら各所を見学しました。改めて、唯一の地上戦であった沖縄戦がいかに過酷なものであったか！多くの住民が戦争に巻き込まれ、ガマでの集団自決や「鉄の暴風」による爆死、北部では、餓死やマラリヤ死などで、総じて当時の沖縄の人口の４分１が無くなったことに無念さと憤りを感じました。

平和の礎は、国籍や軍人、非軍人を問わず沖縄戦の犠牲者の氏名を刻んでいる場所です。３つのブースに分かれています。沖縄県出身者の刻銘碑の前で座り込んで、亡き家族を悼んでいる様子の遺族の方がちょうどおられました。今なお残る戦争の傷跡を垣間見た気がしました。

近くには、韓国人慰霊の塔（左の写真）があり、犠牲者の 1 万余名が祀られています。この碑文には、他の碑にはない表現があります。**「太平洋戦争が勃発するや韓国青年達は日本各地に強制的徴募により日本軍に従軍し、ここ沖縄にも１万人あまりが動員され、戦死あるいは虐殺により命を落とした…」**と。「強制的徴募」や「虐殺」という文言は他の碑文にはないそうです。侵略戦争の実態がこの碑文に凝縮されているのです。

ところで、平和の礎の中の韓国人の碑には、わずか 400 名ほどしか名前が刻まれていません。この慰霊の塔には１万余名とあるのに、何故か？創氏改名が一因で、名前がわからない方が多かった。それに加え、加害者と一緒に、ここに名前を刻みたくない遺族もいるとのこと。また名前があるのは、男性だけ。沖縄には、朝鮮人女性の 130 か所もの慰安所があったというのに。

こうした事実をほとんどの日本人は知らないのではないか？とガイドの川上さんが、疑問を呈されていました。（写真右　平和の礎を前に）

２米軍基地の実態～普天間基地と嘉手納基地から見えてきたもの

■普天間基地

翌日は、米軍基地を見て回りました。今日のガイドは瀬戸さん。嘉手納基地や普天間基地の見学から教わったのは、基地機能の先鋭化や整備不良などによる事故の多発、米軍関係者の犯罪の続発等など。

特に問題となっている普天間基地は、その周辺に１６もの学校関連施設がありました。普天間第二小学校の屋上には赤い警告灯があります。**ここに戦闘機は落ちるな**、とのサインになっているとか！ある保護者は、こどもを日本で一番環境の悪い所に行かせている、と嘆いています。実際、復帰後、８７回もの事故。年平均で２回。機体の平均年数が３９年～４６年と老朽化が進んでいる。その為、いつ大惨事が起きても不思議ではない状況だと。日本本土で、いやアメリカ本土で果たしてこのような危険が許容されるものか、基地と平安な暮らしの両立はあり得ない、という思いを新たにしました。また沖縄に来る米兵は、特別な思いをほとんどもたず沖縄にいると聞きました。あなたたちの存在がどれほど沖縄住民へのプレシャーになっているか、考えて欲しい、と憤りを感じずにはいられません。

■嘉手納基地

軍用道路１号線と言われた国道５８号を北上しもう一つの重要基地「嘉手納」に到着する。「道の駅・かでな」の屋上とすぐ側の「安保の見える丘（米軍はスパイヒルと毛嫌いするらしい）」から嘉手納基地を見学する。土曜日の為、米軍は休み。その為、稼働している軍機は少ない。しかしＰ３Ｃ哨戒機が物凄い爆音で飛び立つ。空中給油機も続く。ここには３７００㍍×９０㍍の滑走路が２本あり、極東最大と言われています（グアムはこの４倍）。Ｆ１５戦闘機が４０機。補給部隊も存在する。最近は、在フィリピンの特殊作戦部隊などの外来機が増え、はきだめ状態になっているとのこと。負担軽減とは逆行し、危険度が増している。驚くことに、Ｆ１５用のシェルターが１５台設置されている。１台、なんと４億円！これも思いやり予算なのか？ここにメスを入れない事業仕分けとは何なのかと繰り返し疑問が胸の中に湧いて離れませんでした。

３辺野古にて～大西さんの話から

そして今回の訪問の最大の目的である「移設候補地」の辺野古の海に着く。ここにはテント村があり、長期にわたり反対運動が粘り強く行われている。その中心を担う大西照雄さんのお話を伺うことが出来ました。

「もう２０００日以上の座り込みをしていて、今日で２３００日。絶対移設はだめ。ここは生物多様性に満ちた海。広大な湿地もある。サンゴ、ウミガメ、ヒサシやジュゴンのえさ場がある。また山は、ヤンバルノ山。照葉樹林。ノグチゲラ、ヤンバルクイナ、日本の野生生物の３２％が住む。ここにヘリパットの基地が計画され、今現在も水陸両用艇の訓練が行われている。辺野古のある沖縄北部は人が少なく、米軍が好き勝手やっても分からない。高速道路上で宙づり旋回の訓練なども行われ、腹立たしい限り。この１３年、地域が分断されズタズタにされてしまった。菅内閣は、妥当すべき内閣。普天間移設という言葉自体がそもそもおかしい。閉鎖、撤退でなければいけない。米軍は普天間にない機能を備えた新基地を作ろうとしている。普天間の問題は１１月（県知事選がある）に一つの決着を見るだろう。」等など。

元教員だけあって詳しい説明と「宝の海」辺野古への深い愛着を感じさせるお話に感銘を受ける。毎日ブログを更新しているといわれていたので、興味のある方は次のキーワードで検索してみてください。⇒「宝の海大西照雄」「ヘリ基地反対協議会」「辺野古はま通信」（大西さんに参加陣からカンパを渡しました。上の写真↗）

４最後に～１９年ぶりの沖縄に思うこと

ほかにもガイドさんたちの勉強熱心さや休日でのボランティア活動に感心しました。また全国の生協の仲間の各地域での活動交流にも刺激をもらいました。貴重な機会を頂き本当にありがとうございました。

私は、１９年前にも同じテーマで沖縄を訪ねました。今回、沖縄の町をぐるっと眺めて一見、１９年前と何も変わらない、との印象が襲いました。ところが、ガイドさんの話を聞くと、基地の内実は先鋭化しているし、犯罪・事故・事件も増えている。一方で、沖縄の海を始めとした自然も奇麗なままだ。しかしそれも辺野古の大西さんを始めとした地道な反対運動の奮闘があったからこそ、維持されていたと言えます。

ある米軍基地は夾竹桃で覆われていました。樹勢旺盛の木々で基地の中を見えなくしているのです。なんと卑怯で姑息なやりくち！！沖縄が抱える問題の深奥を知るには、目を凝らして見なければいけない、と改めて教わった３日間でした。

最後に、辺野古の海には米軍の鉄条網がひかれています。そこに沢山のメッセージがハンカチ等に書かれ、掛けられていました。平和を願い、沖縄と連帯する心が幾重にも幾重にも！左の写真がそうです。ここに新基地を作らせてはいけないと強く思った沖縄体験でした。（以上）